老人の大腿骨頸部骨折の合併症についての検討

大牟田記念病院 整形外科

松下 和 徳

佐賀医科大学 整形外科

忽 那 龍 雄

小柳病院 整形外科

南 尚 次

A Study of Complications in Elderly Patients Treated for Femoral Neck Fracture

by

Kazunori Matsushita

Division of Orthopedic Surgery, Omuta Memorial Hospital, Fukuoka, Japan

Tatsuo Kutsuna

Division of Orthopedic Surgery, Saga Medical School, Saga, Japan

Hisatsugu Minami

Division of Orthopedic Surgery, Koyanagi Hospital, Saga, Japan

The study of complications in 156 patients over the age of 65 years old with femoral neck fracture was undertaken. Of these 156 fractures, 141 cases were operated and 15 cases were treated conservatively.

The results were as follows.

1. General physical complications were observed in 98 cases (62%) on admission and most frequently occurred in cases of 70-79 years of age.
2. Mental deterioration was found in 32 cases (21%) and the frequency of senile dementia depended upon aging.
3. The effective factors for walking ability on discharge were mental disturbance and age.
4. All of the dead cases were accompanied with severe physical complications on admission.

はじめに

近年、人口の高令化に伴い大腿骨頸部骨折は増加傾向にある。老人の大腿骨頸部骨折の治療に際しては、骨折以外に高頻度に身体的・精神的合併症を有しており、特に、入院時に全身状態の把握と改善をはかる必要がある。そこで、私達が治療を行なった65才以上の大腿骨頸部骨折患者について、その身体的合併症や精神的合併症を調査し、問題点を検討したので文献的考察を加えて報告する。

対象並びに方法

過去8年間に私達が治療した65才以上の大腿骨頸部骨折患者は156例（男性28例、女性128例）で、年齢は65才より96才（平均78.7才）であった。骨折型は、内側骨折が75例（男性11例、女性64例）で、それらの平均年齢は77.3才、外側骨折が81例（男性17例、女性64例）で、それらの平均年齢は80.1才であった。

対象症例に対する治療法は、保存療法が15例、手術療法が141例であった。このうち、内側骨折は主に人工頭置換術を、外側骨折はcompression hip screw

による骨接合術を施行した。

以上の症例について、歩行能力は (a) 独歩または T 杖歩行が可能なもの、(b) 両松葉杖歩行が可能なもの、(c) 車いす移動が可能なもの、(d) 寝たきりのものに分類し、身体的合併症は①心疾患②高血圧症③肺疾患④片麻痺を含む脳血管障害⑤ RA や DM などの全身合併症の有無について調査した。また、精神的合併症は長谷川式簡易知能検査法によって分類し、入院時および入院期間中の老年痴呆の出現や増悪の有無、さらに、受傷後または術後の急性錯乱状態 (acute confusional states, ACS と略す) の出現について調査し、これらと受傷前および退院時歩行能力との関連性について検討した。さらに、死亡例について合併症や死因について調査した。

結 果

1) 歩行能力

受傷前の歩行能力は、独歩又は T 杖歩行が可能であったもの 148 例、両松葉杖歩行であったもの 2 例、寝たきり 6 例であった。退院時歩行能力は歩行可能であったものが 114 例 (73%) で、歩行不能例は 42 例でこのうち車いす移動可能なものが 34 例で死亡例が 8 例であった (図 1)。

2) 身体的合併症

入院時身体的合併症は全例の 62% (97 例) に存在し、その内訳は高血圧症 44 例、心疾患 42 例、脳血管障害 12 例、肺疾患 11 例、DM 9 例、RA 8 例であった。これらの年代別有病率は、70 才代が 80 例中 59 例 (74%)

図 1 受傷前と退院時の歩行能力

で最も高く、次いで 90 才代が 9 例中 5 例 (56%), 80 才代が 57 例中 28 例 (50%), 60 才代が 10 例中 5 例 (50%) であった (図 2)。

3) 精神的合併症

入院時精神的合併症は、老年痴呆が 156 例中 32 例 (21%) にみられ、年令別では、90 才代が 9 例中 3 例 (33%), 80 才代が 57 例中 12 例 (21%), 70 才代が 80 例中 16 例 (20%), 60 才代が 10 例中 1 例 (10%) に認められた。

精神的合併症は入院前までに老年痴呆があった 32 例のうち、入院期間中更に増悪したもの 13 例 (40%) あり、また 32 例中、急性錯乱状態 (ACS) が出現したものが 17 例 (52%) にみられた。このうち ACS が改善したのち、老年痴呆が増悪したものが 17 例中 11 例に認められた。

また、入院時老年痴呆のなかった 124 例では、老年痴呆が出現したもの 8 例 (7%), ACS の出現したものが 6 例 (5%), ACS が出現その後老年痴呆が出現したものが 11 例中 5 例であった (図 3)。

4) 退院時歩行能力と身体的および精神的合併症との関連性

図 2 年令身体的合併症

図3 入院期間中の精神的合併症

図4 退院時歩行能力と身体的合併症

入院時に身体的合併症を有していた97例のうち、退院時歩行可能例は73例(75%)で、身体的合併症のなかった59例のうち歩行可能例は40例(68%)であった。

精神的合併症との関連では老年痴呆を有していた32例中、22例(69%)は歩行不能で、老年痴呆のなかった症例のうち歩行不能となった24例(19%)と比べて、明らかに老年痴呆合併症例が、退院時歩行能力が低下していた(図4)。

5) 死亡退院例の検討

死亡退院例は8例あり、全例に入院時すでに慢性心

不全、肺炎など重篤な合併症があった。

また、8例中7例は入院中肺炎や肺水腫から心不全を併発し、1例は術後に広範囲脳梗塞が出現して死亡した。これらの症例は高齢者で身体的合併症を有する骨折患者で、術前に全身状態の改善が出来ず早期手術ができなかった症例であった。

考 察

高齢者の大腿骨頸部骨折患者の機能的予後に関する要因としては、年齢、入院時全身の合併症や老年痴呆の有無などが挙げられている¹⁾³⁾。

今回の私達の調査では、大腿骨頸部骨折患者の受傷前の身体的合併症の有病率は、62%であり、これは昭和61年度厚生省生活基礎調査²⁾における65才以上の有病率64%とはほぼ一致して、高率に認められた。しかし、身体的合併症の有無と退院時歩行能力との関連性は少なかった。

精神的合併症については、高齢者ほど老年痴呆の合併が多く、入院期間中のACSの出現頻度も高く、退院時歩行能力を左右する因子としては、最も大きな要因であった。また老年痴呆のある患者ほど、入院後の身体的、精神的合併症の増悪傾向がある為、可能なかぎり早期離床をはかり、脳循環を刺激し、日常生活への意欲をたかめたり、手術や訓練などの治療に対する理解や認識を与え、医療行為への不安を取り除く努力が必要であるといえる。

結 語

1) 入院時、身体的合併症は62%に認められ、70才代に最も高頻度に合併していた。

2) 入院時および入院後の精神的合併症は、156例中51例(33%)に認められ、入院時老年痴呆があったものでは、入院期間中にACSの出現や老年痴呆の増悪したものが多かった。

3) 退院時歩行能力に影響を及ぼすものは、精神的合併症状の有無と年齢であった。

4) 死亡退院例については、全例が入院時すでに重篤な全身合併症を有していた。

文 献

- 1) 忽那龍雄 他：70才以上の大腿骨頸部骨折患者の治療上の問題点。整形外科と災害外科，34：4-9，1985。
- 2) 人口表並びに簡易生命表：国民衛生の動向，厚生統計協会，1987。

- 3) 立入克敏 他：合併症からみた老人大腿骨頸部骨折の予後. 整・災誌, 27: 385-391, 1984.

~~~~~